

寄稿 磯前順一 (国際日本文化研究センター教授)

「西成」に帰るザ・タイガース

瞳みのるさんと私たちの高度成長の夢



デビュー前のザ・タイガース(当時ファニーズ)の(左から)瞳みのるさん、岸部一徳さん、森本太郎さん—大阪府中央区の大城公園で1966年9月、森ますみさん撮影

日本最大の日雇い労働者街・釜ヶ崎を抱える大阪市西成区。グループサウンズ、ザ・タイガースのドラマーだった瞳みのるさん(愛称、ピー)が、来月23日、この「西成」に帰ってくる。西成区が協賛する「瞳みのる Ha・Peey Birthday Event 2015 in Nishinari」が、同区民センターであるのだ。高度成長期の「最下層」からトップスターに駆け上がったタイガースの歩みは、そのまま、戦後日本を象徴する出来事である。

同センター近くに、デビュー前の1966年、ファニーズと名乗っていた頃のメンバーが共同生活したアパート、明月荘が

今も残る。「あの頃からポロポロでした」。当時、ファンクラブ会長だった森ますみさんは回顧する。

明月荘には、和田アキ子さんや奥村チヨさんも出入りしたという。三畳一間を瞳さんと岸部一徳さん、沢田研二さんと森本太郎さんがそれぞれ共用し、加橋かつみさんは階段下のスペースを使った。貧しいけれど「夢に満ちた時代」だった。

道頓堀のあるミナミから、通天閣のある新世界を抜ける大阪ディープ・サウス(最深部)は、古くから芸能者や宗教者が行き交うアウトロー的な雰囲気にあふれた地域だ。高度成長期、日雇い労働者が全国から同区釜ヶ崎へ集まった時代に、「京都のポ

ン」のアマチュアバンド、ファニーズは、さわやかな空気をもたらした。

当時のリーダーは瞳さん。ミナミの老舗ジャズ喫茶、ナンバ一番での初ステージは、66年2月。5月、関西バンドコンテストで優勝し、アマチュア・カメランでもあった森さんによるプロマイド撮影開始。6月にナンバ一番の人気投票1位、そして東京へのスカウト話。10月、渡辺プロダクションの正式オーディション。11月9日、上京した。「あっとい間だったわ」と、森さんは振り返る。

大阪で細身の黒いアイビースーツを身にまとった5人は、プロダクションの意向で星の王子様のようなアイドルへ転じ、絶大な人気を博した。六本木の隣、麻布飯倉片町にあるイタリアン・レストラン「キャンティ」へ

出入りするようになった彼らは、サウス大阪とまったく異なる、米軍占領の記憶が残る国際的な雰囲気身を浸した。彼らは、高度成長期日本の夢を一気に実現したかに見えた。

東京でも最初は合宿生活だったが、加橋さんが先に抜け、残り4人もばらばらに。69年に加橋さんが脱退。続いて瞳さんの強い解散主張で、タイガースは71年1月24日、幕を閉じる。虚

像を演じることに傷ついた瞳さんは、以後40年間、ファンの前から姿を消す。2011年の自伝『ロング・グッバイのあとで』を機に芸能活動を再開し、タイガースのオリジナル・メンバー全員でツアーをするに至った。

今年上演の劇「仲麻呂と楊貴妃」では、瞳さんが自ら演じつつプロデュースし、日本語と中国語、京劇と演劇が交差する異種混交的な空間を開示してみせた。長い紆余曲折を経て、ついに瞳さんは「決して裏切られることのない」、自分ならではのものを見出そうとしているのだらう。

そんななかで、今回のイベントは、まさにファニーズ時代の「原点に戻る」試みのように思われる。「夢に満ちていた」あの時代の自分に、もう一度どう出会うのか。現代日本の私たちは、高度成長のような夢を簡単に信じられない。たとえば日雇い労働者のように、成長を支えるため犠牲を強いられてきた人々や地域に思いを向けつつ、もう一度明るい社会を夢見られるのか。それが、一人ひとりに問われている。西成に帰るピーは、私たち皆の姿かもしれない。(いそまえ・じゅんいち)

の色川大吉さんが戦後70年を迎えた今、思うことを語る。

芳園(03・3441・7888)。今年3月に亡くなった金子國義の部